詩編 16 編の黙想：主はわたしに与えられた分、わたしの杯（2020 年 5 月 7 日分　TM）

　深呼吸をし、静まってまず、詩編 16 編を朗読しよう。この詩編は、初代教会以来キリスト者の愛唱詩編の一つで、「ミクタム」（黄金の歌）と言われています。み言葉は黄金に勝って貴く、蜂蜜に勝って甘いでしょうか？！

・詩人は、切実に、「神よ、（私を）守ってください」と叫びます。「守る」（シャーマル）は単純に keep を意味し、サッカーのゴールキーパーのようにあなたをがっちり護ります。なぜこのように叫ぶかといえば、「私はあなたに私の信頼を置いている（hāsiti　hāsāh あなたに逃げ込む、避難とする）のだから」というのです。そこから、神と信仰者の「関係」が歌われます。
・あなたは、私の主（アドナイ（2 節）。詩人は僕です。僕の道を貫いた主イエスやパウロに繋がる考えです。主は「私の分」（menāt=my inheritance, helqi=the portion）、「私の杯」（wekōwsi）、「籤あるいは秤縄による私の分け前」（nahalāt 6 節）。「嗣業」（nahalāt 6 節）は英訳では（heritage）であり、５節の「分」と余り変わりません。主ご自身が「嗣業」であるというのです。この地には「嗣業地」のないレビ人のようなものでしょうか？「杯」は苦難を含みますが、祝福された生を意味します。ゲッセマネの園で「この杯を取り除けて下さい。しかし、御心に適うことが行われますように」と祈る主イエスを黙想しましょう。詩編 23：５では「わたしの杯を溢れさせてください」と祈られています。「主はわたしの運命を支える方」＝「わたしの籤（lot）を支える」。「測り縄」（hablim 複数　the lines）とは測量に用いる「ひも」。「測り縄は喜び、嬉しい（場所に）落ちた。私は「輝かしい」（saperah）嗣業を持っている。私の主なる神が何かを下さるから信頼し、喜び、感謝するだけではないのです。感謝は神が与えて下さった「賜物」のゆえになされるが、「賛美」は「賜物の与え主」そのものになされます（worship=worthy）。主なる神ご自身が尊いゆえ、「あなたのほかにわたしの幸いはありません」といいます。神は「すべて」です。神ご自身が、与えられた分であり、杯です。
・詩人は、信仰者たち（この地の聖なる人々、わたしの尊い人々）の中で、宣告します。「ほかの神々の後を追い（交換する、交易する、娶る？）、祭壇に血を注ぐ偶像礼拝者たちとは一線を画していると」。当時は長子を殺して偶像に供えたモレク信仰がありました。「尊い人々」（weaddire→ ādar）は「広い」と言う意味から、増大する、偉大なという意味となりました。実は、これらを偶像崇拝者への揶揄と考えることもできます。
・主は励まし、諭すお方：主なる神と共に生きる信仰者は、その思いを神から励まされ(yaāsāni=私にカウンセリングをして下さる方)、心は夜ごとに諭（yissaūni 私に指図を与える方）を与えられる。
・主はわたしの右にいます（11 節は「右の手」）：信仰者は神に絶えず「相対している」。主なる神を常に自分の前に置いている。遠方や背後ではなく、「前」に、しかも「右」前に！「右」とは権威と力のシンボルであり、この方のゆえに、この世やこの世の人々が動揺するような場面でも信仰者は「揺らぐことはない」のです。
・心、魂、体：信仰者は、まさに全身全霊で主なる神と共に生き、歩みます。
・復活信仰の芽生え：「あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく、あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず、命の道を教えてくださいます。」使徒言行録 2:25‐28、13:34－35 に引用されて、復活の予表とされています。その展開については、使徒言行録 2:29～33 を参照してください。
　神の顔を見る者は死ぬという伝承もありますが、ここでは、御顔を仰いで満ち足り、喜び祝うと告白されています。　わたしたちはやがて主なる神とお会いし、照り輝く体をいただくのです。